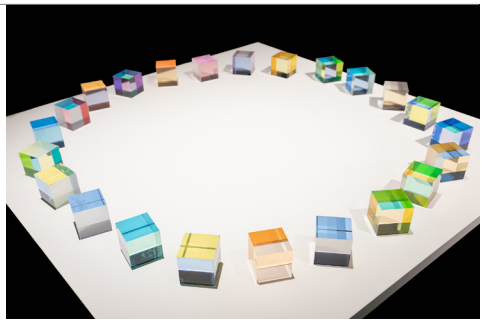
NACT×NCAR *Artist Workshop* for Business

国立新美術館・国立アートリサーチセンター共同企画
法人向けアーティスト・ワークショップ

アーティスト・ワークショップとは、アーティストの創造的表現と思考に触れながら、幅広い視点からアートについて考え、表現活動を体験するプログラムです。これまで現代美術やデザイン、ファッションなど多彩な分野から招かれた第一線のアーティストと100以上のワークショップを開催してきた国立新美術館(NACT)と、美術館の可能性を拡張し人々とアートの接点の多様化を目指す国立アートリサーチセンター(NCAR)は、2024年より共同で企業や団体に向けたアーティスト・ワークショップの提供を開始しました。国立美術館の実績とノウハウをもとに、企業の活動や研修目的に合わせた企画をアーティストと一緒に作り上げていきます。



● 実施例

株式会社ブリヂストン 様

● アーティスト・ワークショップ

「日本の色」

● 講師

流 麻二果

日　時 | 2024年8月28日(水)13:00〜16:30
会　場 | Bridgestone Innovation Park
参加者 | 23名

今回のワークショップは、2022年に開設した「Bridgestone Innovation Park(ブリヂストン イノベーション パーク)」を会場に開催しました。ワークショップのタイトルは「日本の色」。流麻二果氏によるレクチャーでは、アーティスト自身のこれまでの活動と作品の紹介を通して、現代アートについて学ぶとともに、「色」についての考えを深めます。続いて「これまでの人生で最も印象的な／美しかった場面を思い浮かべてください」と「今の日本を客観的に見て3つの言葉で表してください」のいずれかの質問を参加者それぞれが考察し、連想される色を選んでキューブを作成しました。最後に、参加者同士で互いのキューブを鑑賞しながら、自身の制作したキューブについて、色を選んだ理由やキーワード、エピソードなどを発表し合いました。

Workshop Photo by io

About Workshop　「日本の色」

色と向き合うことで、100人いれば100通りのものの見方、感じ方があることを意識する

日本語で、多様であることを「色々」と表すように、日本においての色は、単なる色名だけでなく、人それぞれの視点で捉えた感性や意思を表します。「日本の色」は、アーティスト流麻二果氏による、今を生きる人々の眼差しを採取し、その多様な視点を通して、今の「日本の色」を見つめ直すアートプロジェクトです。

Artist Profile　流 麻二果 ながれ まにか

大阪生まれ、香川県育ち。女子美術大学芸術学部絵画科卒業。文化庁新進芸術家在外研修員(2002年)、ポーラ美術振興財団在外研修員(2004年)。日本の色彩文化のルーツを油彩で表現し、その独自の色彩感覚から色彩の画家と言われる。国内外での展覧会を始め、パブリックアートや建築空間の色彩監修、パフォーマンス制作など絵画の可能性を開拓すべく幅広く活動している。国立新美術館では、2017年3月にワークショップ「2017年の日本の色を見つけよう」を企画・実施。

THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO 国立新美術館

独立行政法人国立美術館 国立アートリサーチセンター National Center for Art Research

Corporate Voice
企業担当者に聞く

**企業の担当者にとって、アーティスト・ワークショップを開催し、
社員に体験してもらうことにはどのような意味があるのでしょうか。
今回の企画を主催した株式会社ブリヂストン探索事業開発部門共創推進統括課の山田和範氏にお話を伺いました。**

山田和範氏
株式会社ブリヂストン探索事業開発部門
共創推進統括課

開催に至った経緯を教えてください。

ブリヂストンは、ものづくりメーカーとして品質を何よりも大切にしています。ロジカルな仕事の進め方・考え方をベースに技術力を高める視点や、現物現場でお客様の要望や課題に真摯に向き合い、解決していく姿勢は、長年にわたり蓄積してきた我々の強みとなっております。ただ、どうしても技術的な視点にこだわり過ぎたり、直接的なお客様の声を意識したモノづくりやサービス追求に視点が偏りがちです。そういった視点はこれまでの我々のコアなビジネスの考え方として大切な部分ではありますが、会社の実績や経験ゆえの慣習的な仕事の進め方や固定概念がイノベーションのネックになるのではないかという懸念もありました。また、普段の仕事の中で社員が一人の人間として「どのような社会を作りたいのか」「何を大切に思っているのか」を表現する機会が非常に少ないとも感じていました。こうした個人的なビジョンはこれからの時代において非常に重要で、仕事をする上でのモチベーションに大きくつながると私自身は考えています。そこでビジネス以外の分野の方々との接点を持つことで、新しい視点や思考が生まれるのではと思い、アーティスト・ワークショップの導入を考えました。

アートやアーティストの思考が、具体的にビジネスとどのような繋がりがあると考えていますか？

アート作品を鑑賞する行為では、視覚的な情報だけでなく、むしろその作品の裏側の目に見えない情報(時代背景やストーリー、作者の心情など)をいかに想像し、感じ取ることができるかに価値があり、それこそがアートの醍醐味だと私は考えています。それゆえに、ひとつのアートを見ても十人十色、さまざまな見方や意見、感じ方ができると思っており、そのような視点や思考は、さまざまなステークホルダーの視点を想像したり、より俯瞰した視点で社会とのつながりを意識するなど、我々のビジネスにも必要ではないかと考えたのです。また、アーティストの思考もビジネスと深くつながりがあると考えています。アーティストが自ら問いを立て、未来を見据えるプロセス、創造的な発想、チャレンジする勇気を持って取り組む姿勢、そしてまず手を動かしてみること。結果と対話しながら問いを洗練させていく―こうした姿勢から学ぶことは、とても多いと感じています。

この企画を実現するまでに心がけたことはありますか？

企画を社内で通すのは大きなチャレンジでしたが、承認を得るためには「自社のビジネスにどのように貢献するのか」という成果を見込んで説明することが重要です。アートや抽象的なことに馴染みのない方も多いため、丁寧に説得することを心がけながらビジネスとの連携を具体的に提示し、5年後・10年後にどのような良い影響が生まれるかをしっかりと伝えました。このような企画は会社からのサポートがなければ継続できません。そのため、普段から社内でのコミュニケーションを大切にし、「この取り組みがいかに重要であるか」ということを、情熱を持って伝え続ける姿勢が不可欠だと感じています。

実際の反響はいかがでしたか？

想像以上に大きな反響がありましたね。普段、ロジカルな仕事の進め方を重視している中で、このような抽象的な活動が受け入れてもらえるかどうか、不安もありましたが、多くの参加者がワークショップに深く共感し、真剣に取り組んでくださったことがとても嬉しかったです。参加者からは、「非常に意義深かったのでぜひ継続してほしい」という声も多くありましたし、実際にワークショップで得た結果を業務にどう活かせるかを自主的に考え、部内に発信してくださる方もいました。また、普段は業務の話にコミュニケーションが偏りがちですが、社員同士で抽象的なことや感覚的なことについて会話する、という新しい経験を得てもらったことも、企画側としても大きな喜びです。今回のワークショップは個人の思考回路に働きかけることを目的としていましたが、結果として「組織全体の風土変革」や「イノベーション創出の文化醸成」につながる兆しが見えたことは大きな収穫でした。また流さんが「自分自身と向き合うこと」「他者を理解すること」の重要性について語られていたことは、社内での人間関係やコミュニケーションにも通じるところがあり、このような感覚的な共有が、将来的な企業のイノベーションにつながっていくのではないかという実感を抱きました。

Participants' Feedback
参加者の声

全体満足度	とても良い：65% 良い：35%
今後も同様のアート関連ワークショップを社内で開催してほしい	90%

- 素晴らしいワークショップでした。自分自身を知るだけでなく、自分自身が会社を通して社会にどのような価値を発信できるのか、一人一人が考えるきっかけになりました。このような抽象的な問いに向き合うことは、日々の業務に追われる中では考え続けられないと感じます。
- アートを通じて自分の思いや感じたことを表現することの楽しさ、大切さを学ぶことができました。
- 普段とは異なる視点や思考回路を働かせる良いきっかけになった。
- 他者の様々な視点を知り、それと自分の視点を対比することで、自分の特性を知ることができた。
- 一人一人が素敵な感性を持っていても、仕事で発揮したりその様な場面を垣間見ることがほとんど無いと感じます。このワークショップのように、「自由に表現していい、一人一人の個性を認め合う」という前提が職場にもあれば、だいぶ仕事の雰囲気や場のエネルギーが変わるのでは、と思いました。